

令和七年度 第二十六回

「秋の歌会」

歌集

佐鳴台の詩



浜松市立佐鳴台中学校

目次

表紙絵

目次

テーマ

生徒作品

一年生

俳句

短歌

二年生

俳句

短歌

三年生

俳句

短歌

職員作品

テーマ

「希望」「歴史」「憩い」「仲間」「環境」



▼一年生▲

〈俳句〉

天高し 残暑吹き飛ぶ 秋の風

神無月 未だ現れぬ 冬隣

佐鳴湖の 湖面に揺蕩う 赤とんぼ

湖へ 降りてきそうな 秋麗

佐鳴湖で 秋風ふかれる ススキかな

終わらない 輝く日差し まぶしいな

秋の時期 寒さが増し 家でれない

夕暮れに 残暑続く 虫の声

秋なのに 夏よりいない とんぼたち

秋なのに めっちゃあつい なんでだよ

佐鳴湖で 山に広がる 紅葉樹

佐鳴湖の 水面に映る 秋の空

色づく葉 秋めく風に ゆらされて

いつまでも 過ぎてゆかない この暑さ

秋はなぜ 休みがないの 不思議だな

水の波 ボートも揺れて かぜもゆく

夕まぐれ 葦のさやぎに 風わたり

行く時に 木の実見つけた 秋みつけ

秋なのに 暑さがのこる 温暖化

佐鳴湖は まだまだ暑い 秋なのに

佐鳴湖の 湖面に映える 秋の影

小鳥来る もう涼しいな 秋の声

秋なのに 照りつけてくる 日差し暑い

秋の空 オレンジ色で きれいだな

湖に けい雲写る 冬どなり

目の前で 八の字ダンス 赤とんぼ

佐鳴湖に 遠くから見る 秋の山

湖で コスモスたちが かれている

青空を 水の鏡で 光らせる

佐鳴湖 セミがなく秋 まだ夏だ

なみのかぜ あきをかんじる いまここに

僕の目に 映るは枯れ葉 踏みにじる

木々の下 木陰でゆつくり 秋暑し

風吹くと 夏も終わりだ 秋が来る

ゆつくりと 雲が流れる 秋の空

秋の空 あせだくだくで まだあつい

森の海 気持ちがいいな 大自然

水面に きれいにうつる 青空だ

秋の風 猛暑が続く この暑さ

ジージーと セミの声聞く オータム

日光で 黄色く光る 秋の草

セミの声 聞こえる暑さ まだ夏かな

佐鳴湖の もみじはまだ 緑色

すずしき日 晩秋には いつ会える

秋の色 空が青色 草みどり

ゆうゆうと 流れる雲と ねるわたし

緑の葉 いつになつたら 夏終わる

暑い秋 風と太陽の 戦いだ

虫の音が 自然に広がる 佐鳴湖に

寒露の日 まだまだ暑いが 風すずしい

秋風に 湖光る 歩く道

佐鳴湖は 色とりどりで 秋らしい

佐鳴湖は トンボが飛んで 行秋だ

今日は夏 昨晩は冬 秋は来ず

佐鳴湖が 秋の湖と化す 秀麗だ

水面に 秋の輝き 写つてゐる

夏と秋 どちらも見れた 貴重だな

秋の葉が 彩る季節 鮮やかに

秋の風 残る暑さが きびしいな

冷風が 少しだけ吹く 秋くるか

これからは 秋が始まる 佐鳴湖だ

秋の風 涼しい風が 吹く秋だ

爽やかな 秋風吹いた 佐鳴湖に

頭上に とんぼが飛び交う 秋の夢

映つてる 飛び交う蜻蛉 水面に

秋の空 先生一人 きみしいな

赤とんぼ 空でかけっこ しているよ

秋の木々 赤黄緑 水面に

きれいだな 葉の色変わる 秋の森

遅れ秋 木の葉の穂先 赤みあり

見上げれば どこまで続く 秋の空

赤い木々 僮く落ちる 落ち葉たち

佐鳴湖の 秋の歌会 開幕だ

秋の日に やぶ蚊に刺され かゆすぎる



〈短歌〉

神無月 紅葉の帳 佐鳴湖は

たえてことなり みどりの葉

風が吹く 秋でもまだ暑い 佐鳴湖は

自然が多く 景色がきれい



▼二年生▲

〈俳句〉

佐鳴湖に 秋風がふく すずしいね

秋の風 ゆらゆらゆれる 爽やかだ

びつしよぬれ 秋でも水だ 白い犬

秋の草 こうろぎの声 こだまする

秋の空 雲がきれいで 涼しいな

秋の森 映りだす海 美しく

秋空の 音色奏でる 柔き風

秋麗 湖輝く 空の下

ふと見れば 魚よろこぶ 秋の水

黄色の木 ずっと見えてると どうもろこし

あおい空 横断中の ほうき雲

佐鳴湖に 緑豊かな 季節きた

夏の空 もうすぐ夏が 終わりだな

秋の空 無数に浮かぶ 雲たちよ

佐鳴湖の 水面に映る 秋の空

温かな 日差してらされ 秋の風

白鳥の 翼輝く 秋の空

山粧う 色鮮やかな 自然たち

佐鳴湖は 緑たくさん 湖も

秋の風 ゆらゆら揺れる ススキの葉

佐鳴湖を バックに映える 草の花

佐鳴湖の 爽やかな風と 水の音

佐鳴湖に 逆さに映る 秋の空

佐鳴湖に 落ち葉ひとひら 風に舞う

佐鳴の湖 秋陽強く 暑苦しい

秋の空 風がふいて 気持ち良い

佐鳴湖に 色づく季節 訪れる

秋の風 みんなとおしゃべり たのしいな

壮大で 暑さ霞んだ 秋空だ

佐鳴湖の 木々のみどりが 草紅葉

秋晴れの 湖面にうかぶ きょうかいせん

紅葉が みどりにまじり 秋めく景色

風にのり 湖面に揺れるは 秋の空

オレンジのはっぱひろつた さなるこで

水面の 夏の太陽 秋の風

紅葉が 始まってきた 季節だね

トビハゼを 見つけ帰りは 栗拾い

佐鳴湖の すずしい風に 赤トンボ

佐鳴湖の 水面に写る 秋の空

アカトンボ 共に流れる 湖よ

どんぐりを ぽけっとたくさん ひろったよ

秋のそら 見上げてみても なにもない

風が吹く ゆらりゆられる 赤とんぼ

風に乗り　どこから来たの　落ち葉たち

涼しげに　浮かぶとんぼと　虹の雲

花すすき　わけてできる　通り道

木々並ぶ　秋の音する　太陽や

秋の風　感じて歩く　犬かわいい

秋の空　くつきり浮かぶ　色づく葉

〈短歌〉

佐鳴湖の 水面に揺れる 紅葉たち

紅色輝き 夕日に染まる

秋空の 哀愁うつす 佐鳴湖よ

見惚れてしまう たたずまいなり

佐鳴湖に 嫌な思い出 流す日が

忘れられない 忘れたくない

佐鳴湖で 赤や黄色に 色づいて
風に揺れる葉 秋麗の日

佐鳴湖の 揺れる水面に 映る木々

秋風感じ 詠んでる僕等

十月 そろそろ冬が 訪れる

この佐鳴湖に 風の音澄む

ほんのりと 秋の色彩 浮かびけり

時雨を待つて 風はそよめく

溜まり水 水面に浮かぶ 秋晴れの

跳ねる魚の 波紋広がる

仰向けて 秋空あおぐ 僕の手よ

脳裏に焼き付く 澄んだ青空

▼三年生▲

〈俳句〉

こよみじょう 秋が来たはず 夏みたい

秋の風 草木が揺れて ひとあくび

木の陰で おやまざわりで 秋をよむ

景色でも 肌でも感じる 秋が来た

秋風が 詩を運んで 届けるよ

暑らしく ぽつんと一羽 カワセミか

神無月 季節染まらず 夏の色

秋の色 きれいに見える 佐鳴湖よ

佐鳴湖の 秋の空気と 夏の影

佐鳴湖は ともに流れる 秋風と

秋なのに 秋感じない 暑さだな

涼風や 共に感じて 名を呼ばばず

ああ秋よ いつになつたら やってくる

佐鳴湖に 秋の風吹く 気持ちいな

広げゆく 秋の香りや 満ちてゆく

佐鳴湖で 秋風感じる あなたかな

風來たる 涼しき感じ 秋思う

秋なのに 窓のむこうは 夏の風

秋風の 吹くに吹かれぬ 夏の色

夏の暑さ 秋風吹いて 汗ひけり

佐鳴湖に 秋の魚が やってきた

秋風が 撫でる地面は 夏景色

秋景色 水面の光 煌びやか

秋の山 落ち葉舞い散る 紅葉の葉

佐鳴湖の 日差し和らぐ 秋よ来い

先生の 笑顔が映る 稲と水

秋麗 朱の入り交じる 木の葉かな

秋の朝日 佐鳴の熱に 短命か

外熱く 秋がまつたく 感じない

蟹の色 紅葉引き立つ 枝の色

今は秋 もう暑すぎて もはや夏

ゆるやかに 秋風の吹く 水面かな

風が吹き 水面煌めく 秋麗

風流れ 星漂う 秋の湖

石を投げ やつと飛べたの 2回だけ

佐鳴湖の 水面ゆらす 秋の風

あかあかと きれいな光沢 葉が落ちる

佐鳴湖で まだかまだかと 秋の風

国旗揺れ 秋のそよ風 心地よい

佐鳴湖の ほどりに座り 秋感じ

ランニング みんなと走れば 怖くない

紅葉色 思い出と共に 咲く思い

秋景色 紅葉もない 夏のよう

うお跳ねる かつおのよう に 見えてくる

黄金舞う 風に揺られて 秋の声

ギラギラと 光る湖 もういいよ

赤い葉っぱ 風にゆられて ふわり舞う

秋の空 佐鳴湖合わせ 天下統一

橋の下 流れる秋の葉 そよぐ風

秋晴れの 光る水面を 紡いでく

湖の 木々より深い 秋の色

風そよぐ 水鏡揺れて 秋の空

佐鳴湖に 紅葉輝く 君の顔

日差しつよ 季節まだまだ 夏やんけ



〈短歌〉

日光は 夏のようだが 吹く風は
涼しくまるで 秋風のよう

暑き日の 緑の中の 紅色に

夏との別れ 初秋感じる

焦げる肌 サングラス付け フエス気分

湖を見る 三十一歳

咲いている 十月なのに たんぽぽが

まだまだ続く 暑い時期

▼職員▲

〈俳句〉

秋の湖 はないちもんめ 韶きをり

秋の空 蜻蛉のごとく 飛び交う声

佐鳴湖に まだまだ来ない 秋模様

秋はどこ？ それでも楽しむ 3年生

佐鳴湖に 鮭はいなか・・・ 腹減つた

穏やかに 流れる秋風 私の速度

空は澄み 地には落葉 秋の音

汗ぬぐう 紅葉眩しい 寒露かな

さなる湖の 秋色揺れる 水鏡

落ち葉追う 中学生の 声はずむ



〈短歌〉

秋の蝶 天まで高く 舞い上がれ
私の夢と 希望をのせて

秋空に 韶く歌声 J - P O P

知らない曲に 時を感じる

仲間との 想い出うつす 秋の湖面

旅立つ君の 幸せ願う

ひたひたと 水面静けき 秋の日に

「せんせい」と呼ぶ 賑やかな声

湖風に 舞い踊り飛ぶ ふたつ鳥

幼き頃の 吾子に重なる

秋来ぬと 見上げた空に 惑わされ

日焼け止め塗る 三十一度

なぜ走る 十五の背中 追いかけて

秋の湖畔で 深呼吸



